

# 江戸・東京語における連体形準体法ならびに準体助詞ノの研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 蔡, 欣吟 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/16704">http://hdl.handle.net/10291/16704</a>

# 2013年度 文学研究科 博士学位請求論文（要旨）

## 江戸・東京語における連体形準体法ならびに準体助詞ノの研究

学位請求者 日本文学専攻  
蔡 欣吟

### 論文の要旨

#### 1. 本論文の目的および構成

本論文は、その交替期と目される江戸後期から明治中期における連体形準体法と準体助詞ノの使用状況を調査・分析したものである。序章、本論として調査期間を五分割しての各章、終章の併せて七つの章から構成される。

本論文の課題は、江戸後期から明治中期における連体形準体法と準体助詞ノがどのような棲み分けをしているのかについて詳細な分析を行うことにある。先行研究では、この連体形準体法と準体助詞ノについて巨視的な調査・分析が行われている。しかしながら、新旧の形態が交替する時期についての詳細な分析を行ったものは見当たらない。本論文の目的は、言語資料が整っていても江戸後期から明治中期における連体形準体法と準体助詞ノの使用状況を調査・分析することにより、両者が並存する時期において、準体助詞ノがどのような用法から勢力を拡張し、連体形準体法がどのように衰退していったのか、また、その変化に影響を与えていた要素が何なのかを明らかにすることである。

調査期間は1775年から明治30年代の約120年間とし、これをおよそ30年間隔で五つの時期に分けた。この五つの時期における口語性の高い資料を複数のジャンルより選出し、使用例を収集した。

調査方法としてはまず、各時期の資料より採集した用例を地の文と発話文に分けて考察した。次に、連体形準体法あるいは準体助詞ノにおいて、上接する活用語部分が文語か口語か、下接する助詞が何か、連体修飾構造の点から同一名詞か同格かといった視点から分類を行った。また、発話文においては、使用者による連体形準体法と準体助詞ノの棲み分けに差異があるか、といった視点から使用例を分析した。最後に、分析の結果を通して、江戸後期から明治中期における連体形準体法と準体助詞ノの全体像を把握し、通時的な視点から変遷に関わる要因を検討した。

#### 2. 各章の要約

序章では、研究目的、先行研究、研究対象、調査資料、研究方法、本論文の構成および凡例を提示した。

第1章では、洒落本14作品、黄表紙10作品、咄本3作品を用いて、第一期(1775～1785)における連体形準体法と準体助詞ノの使用について調査・分析を行った。地の文では準体助詞ノは3例使用されるのみであり、連体形準体法が優勢である。その3例には、上接の活用語が口語である、もしくは下接の助詞が接続的な用法である、という特徴がある。発話文では準体助詞ノの使用率は平均で約20%であった。上接の活用語については、文語は連体形準体法で用いられるのに対して、口語には準体助詞ノが付きやすいことが観察された。使用者の分析からは、準体助詞ノは性差に拘わらずほぼ同程度で使用されていること、遊里関係者と客の間においては準体助詞ノの使用が多くあるのに対して、遊里関係者同士では連体形準体法を多用することが観察された。第一期では準体助詞ノは主として廓での接客において用いられているということが考えられる。

第2章では、洒落本5作品、滑稽本『浮世風呂』『浮世床』を用いて、第二期(1805～1815)における連体形準体法と準体助詞ノの使用について調査・分析を行った。地の文では準体助詞ノは3例使用されていた。使用上の特徴として、上接の活用語が口語であることと、五七調の韻を踏むための使用であることが挙げられる。発話文では、準体助詞ノの使用率は平均で約36%で、連体形準体法が優勢である。また、第二期洒落本は滑稽本より準体助詞ノの使用率が高いが、その理由は登場人物にあると考えられる。準体助詞ノがつくものには口語の活用語が多く、これは第一期と同じ傾向を示す。使用者の分析からは、女性による準体助詞ノの使用率が大幅に男性を上回ること、また、上方や地方出身者は男女とも連体形準体法のみを使用すること、教養層の使用者では、女性は連体形準体法のみを使用し、男性は準体助詞ノも使用するが使用率は低いことが見られた。

第3章では、洒落本1作品、滑稽本『和合人』、人情本

『春告鳥』を用いて、第三期(1835～1845)における連体形準体法と準体助詞ノの使用について調査・分析を行った。地の文では準体助詞ノが2例使用されるが、五七調の韻を踏むために用いられたものである。発話文では準体助詞ノの使用率が大幅に増加し、準体助詞ノが連体形準体法を上回った。上接する活用語について見ると、口語が連体形準体法で用いられる使用がある。上接する活用語の口語性が必ずしも準体助詞ノが選択される必然的な要因にはならないことが見られる。使用者の分析結果としては、男性よりも女性において準体助詞ノの使用率が高く、約84%である。準体助詞ノの浸透は女性において比較的進行している。準体助詞ノの使用率が増えているなか、連体形準体法は不穏な場面で用いられることが観察された。

第4章では、人情本『春色恋廻染分解』と滑稽小説『安愚楽鍋』『西洋道中膝栗毛』『怪化百物語』を用いて、第四期(1860～1875)における連体形準体法と準体助詞ノの使用について調査・分析を行った。地の文ではすべて連体形準体法が使用されている。そのうち、人情本『春色恋廻染分解』には、口語の活用語形容詞イが連体形準体法で用いられる使用が1例あるが、これは五七調の韻を踏むために使用されたことが考えられる。発話文では準体助詞ノの使用率は平均で約75%である。上接の活用語としては文語の活用語の使用が多く、すべて連体形準体法で用いられている。使用者に関しては、女性による準体助詞ノの使用率は大幅に男性を上回り、約90%に上った。滑稽小説では女性には連体形準体法の使用がない。そして、人情本では遊里関係の女性に準体助詞ノの使用率が高い。滑稽小説において、準体助詞ノのみを使用する男性発話者は目新しいものや新奇なものを好むような人物であった。それに対して、連体形準体法のみを使用する男性の存在については、地域差によるか、もしくは知識層という身分によると考察した。

第5章では、小説『金色夜叉』『社会百面相』と国定教科書『尋常小学読本』を用いて、第五期(1895～1905)における連体形準体法と準体助詞ノの使用について調査・分析を行った。地の文に関して、三つの資料ではそれぞれ異なる傾向を示している。『金色夜叉』では連体形準体法のみが使用されるが、それは地の文の文体が文語体であることに関係する。『社会百面相』では準体助詞ノの使用率は約45%である。「だ」調と「である」調が混在する地の文において、文語による制限がないため、準体助詞ノの使用率が高まったのである。『尋常小学読本』における連体形準体法と準体助詞ノの使用は地の文か発話かによ

る影響がないと考えられる。発話文に関し、『社会百面相』では連体形準体法の使用が多いが、これは上接する活用語に文語や漢語サ変動詞が多いこと、文中で文語や漢語が混在すること、自己主張する発話が多いためと考察した。なお、同格の連体修飾関係より、同一名詞のほうで準体助詞ノの使用率が高い。これは第一期から第五期まで同様の傾向を示している。

終章では、本論文のまとめとして、結論と残された課題について述べた。

本論文の結論は以下のようなものである。連体形準体法と準体助詞ノの使用に影響を与える要素とその使用の特徴としては、①文語の活用語が連体形準体法で用いられるのに対して、口語の活用語には準体助詞ノが付きやすいこと、②下接する助詞「ニ」「デ」「ヲ」「ガ」「モ」などに準体助詞ノが使用されることによって、文中の関係性がより明確になること、③連体修飾構造について、同格より同一名詞の連体修飾構造において準体助詞ノの使用率が高いこと、が確認された。以上の特徴をまとめると、連体形準体法では不明瞭さやあいまい性などの不都合が生じていた点が、準体助詞ノによって解決されるというような、伝達効率の向上へ向けた変化であったといえる。そして、この変化は文中の関係性をより明確にし、日本語の表現が論理的になることにつながっている。

終章ではまた、必要に応じる形での連体形準体法から準体助詞ノへの移行という結論から、先行研究で提示されている連体形準体法と準体助詞ノの関連性について検討した。本論文では、準体助詞ノは連体形準体法によるのでは不明瞭となる文中の部分を明かなものとして示す場合に用いられている、つまり、連体形準体法では表現しきれない部分を補っていると見た。また、準体助詞ノの発達で連体形準体法が衰退したのであれば、準体助詞ノの使用はより積極的で、分散的なはずであるが、本論文では、準体助詞ノはまず必要な場合にのみつくようになり、限られたいくつかの用法に使用されることが目立つ、ということを観察した。これらの点から考えると、準体助詞ノの発達によって連体形準体法が衰退したとは考えにくい。以上の理由に基づき、連体形準体法が準体助詞ノに取って代わられたのは、準体助詞ノによって、衰退した連体形準体法の機能が補償されたためとする説に賛同した。

一方、使用者の側面から検討した結果、第一期では男女差がほぼないが、第二期からは女性のほうが準体助詞ノを多用することが見られた。また、第二期から第三期にかけて、男女ともに準体助詞ノの使用率の増加が顕著

である。第五期になると、女性による準体助詞ノの使用率は約98%に達したのに対して、男性は約78%にとどまっており、準体助詞ノの浸透は女性から進んでいたことが確認できた。さらに、時期順に身分・階層や地域による連体形準体法と準体助詞ノの使用上の特徴に注目し、考察したところ、準体助詞ノの展開は廓言葉→一般女性語→東京共通語→標準語といった過程を取っていることが確認された。

最後に残された課題について触れ、①連体形準体法と準体助詞ノ、形式名詞、一般名詞との関連性を探ること、②時代を遡り、精査すること、③明治中期以降に見られる連体形準体法の使用を調査すること、④調査資料を増やすこと、を今後の展望として述べた。

